金融教育の現場レポート

高知大学教育学部附属特別支援学校
安岡知美教諭

～特別支援学校高等部の金融教育～
知的障がい者の生きる力につながる「お金の使い方と社会の仕組み」を家庭科で学ぶ

今回は、高知大学教育学部附属特別支援学校（以下、高知大学附属特支）の高等部で家庭科を担当する安岡知美先生が、「(注)第18回金融教育に関する実践報告コンクール」で特賞を受賞した実践授業です。知的障がいを持つ生徒の卒業後を見据え、お金の使い方を中心としたカリキュラム・マネジメントに取り組んだ安岡先生にお話をうかがいました。

(注)https://www.shiruporuto.jp/public/document/container/concours_kyoin/2021/pdf/21kyoin001.pdf（知るぽるとWEBサイト）

安岡知美教諭

知的障がいの特別支援学校における学習指導の特色

特別支援学校（以下、特支）とは、視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、肢体不自由または病弱者（身体虚弱者含む）の障がいを持つ幼児児童生徒が、自立に必要な知識や技能を習得するための学校です。幼稚部、小学部、中学部、高等部があり、少人数制の学級編成を実施。高等部では1学級8人を標準としています。

高知大学附属特支は、知的障がいの特支として1970年に創立しました。高知大学のキャンパス内に校舎を構え、小学部から高等部まで60名が在籍する小規模な学校です。高等部は1学年1学級の編成で、6歳から10歳程度の発達段階（2022年度）の生徒を中心に、計24名が学んでいます。

「知的障がい特支における学習指導の特色は、各教員に任される裁量が大きい点です。生徒の障がいは個々であり、同一学年でも発達段階や学習状況は異なります。そのため、一斉に同じ教科書を開くスタイルの授業は少なく、各教員が生徒に合わせた教材を用意したり作成したりする、オーダーメイド的な指導を行っています」。

そう説明する安岡先生は2014年度に赴任し、中学部と高等部の家庭科を担当しています。

「本校では、生活に根差し自立に直結する家庭科を、重要な教科に位置付けています。調理実習では生徒1人に調理台1台が用意され、食の学習を中心に、衣食住や消費者教育など自立に必要な知識とスキルを身に付けることができるようにしています」。

生徒の金銭感覚の危うさが金融教育に取り組むきっかけに

2018年度より安岡先生が取り組み始めた金融教育は、家庭科で行う食材購入の買い物学習がきっかけでした。

「調理のスキルが向上した生徒でも、

２年生の実践授業「かっこいい社会人のお金学習」。銀行口座の作り方や給与明細にある控除項目の意味、給与の使い方などを疑似体験する

買い物で戸惑う姿が頻繁に見られました。卵など食材の値段を知らない、肉の種類の違いが分からない、予算オーバーの食材をカートに入れるなど、金銭を賢く扱えるスキルが不足していることに気づきました」。

さらに、生徒たちのふだんの会話からも金銭感覚の危うさを感じたと、安岡先生は言います。

『一般企業で働きたい。初任給は3000円くらい』、『家賃5000円で渋谷のマンションに一人暮らし』、『10万円で新車を買う』など、生徒たちはそれぞれ夢を持っていますが、夢をかなえるために知っておくべき一般常識、商品やサービスの相場、社会の仕組みを理解していませんでした。消費者教育においても、電子マネーなど見えないお金の仕組みを理解できず、銀行口座の存在さえも知らない生徒がいる中で、被害事例や対処法を一方的に教えるこれまでの指導方法では、本当の生きる力は身に付かないと感じました」。

こうした気づきから、安岡先生は生徒にどのような教育が今必要なのかを思案し、手探りで金融教育のカリキュラム・マネジメントに取り組みました。

「これまでの知的障がい特支の教育では、お金の稼ぎ方には注力しても、お金の使い方を十分教えていないように思います。お金を賢く使う学びは、生徒にとって生きる力につながるライフスキルと分かり、その指導方法を考えるうちに、金融教育にたどり着きました。生徒が卒業後、自分の力で夢をかなえ、豊かで生きがいのある人生を送るためには、お金の使い方を学んでその働きを理解し、社会の仕組みを知って自分の暮らしを考えられるようになることが必要なのです」。

アンケート等を実施して生徒の金融リテラシーを把握

カリキュラム作成に向けて、安岡先生は生徒の金融リテラシーの実態を把握するため、生徒と保護者にお小遣いについてのアンケートを行いました。

「定額制のお小遣いをもらっている生徒は、24名中2名だけ。『もらっていない』、『欲しいときだけもらう』という回答が多く、家庭でお金を管理し計画的に使う経験をほとんどさせていないことが分かりました。お金を考えて使う経験をさせるために、買い物学習で数回分の予算を渡し、先を考えながら買い物をさせるようにしました」。

また、一人暮らしの家計管理を疑似体験する「ひとり暮らしシミュレーション」を行いました。将来、給与をもらって1人で暮らすことを想定し、家計にどんな項目があるかを学びます。家賃や食費、光熱費、通信費などをそ

金融教育を受けた卒業生が「後輩の役に立ててほしい」と送ってくれた給与明細書を教材に、保険や年金、税金の種類や意味を学ぶ

「銀行で通帳を作るときに必要なものは？」に正解して喜ぶ生徒たち。「生徒自身もお金のことをもっと知りたいんです」と安岡先生は言う

「先輩より税金を払える大人になりたい」、「知りたかったことが分かってスッキリした」など、振返りシートに授業で分かったことや感想を記入

生徒の発達段階はそれぞれ異なるため、授業ではその都度一人ひとりに応じた支援を行いながら、理解できるように取り組んでいる

れぞれ金額別に3パターンから選択させ、その金額を給与から差し引くことで、家計管理を考えるようになります。

「こうした授業では、『こういうことも知らないの？』という驚きと発見がいつもあります。ひとり暮らしシミュレーションでは、住まいを借りると家賃が必要ということを初めて知った生徒もいました。知的障がい特支の教育では、教師が当たり前と思っている常識のフィルターを外して、生徒に必要な学びを模索することが大切です。金融教育のカリキュラムを作るうえでも非常に苦心しました」。

リアルな情報とゲーム性を教材や授業に組み込む

試行錯誤を繰り返しながら、2020年度に金融教育カリキュラムの形になってきました。

「知的障がいの生徒の学習特性を考慮して、教材や授業に色々と工夫をしています。例えば、学んだ知識や技能が断片的になりやすく、実生活に生かすことが難しい特性があります。生徒たちが知っている企業名や商品名、仲良しの卒業生を登場させるなど、できるだけリアルな情報を組み込み、学習内容をイメージしやすくしました。また、活動に主体的に取り組む意欲が弱い特性もあるため、生徒が興味を持って能動的に学習に取り組めるように、クイズやバーチャル形式などゲームの要素を多分に取り入れています」。

授業例と具体的な実践内容をいくつか紹介します。

■もののねだんあてクイズ大会

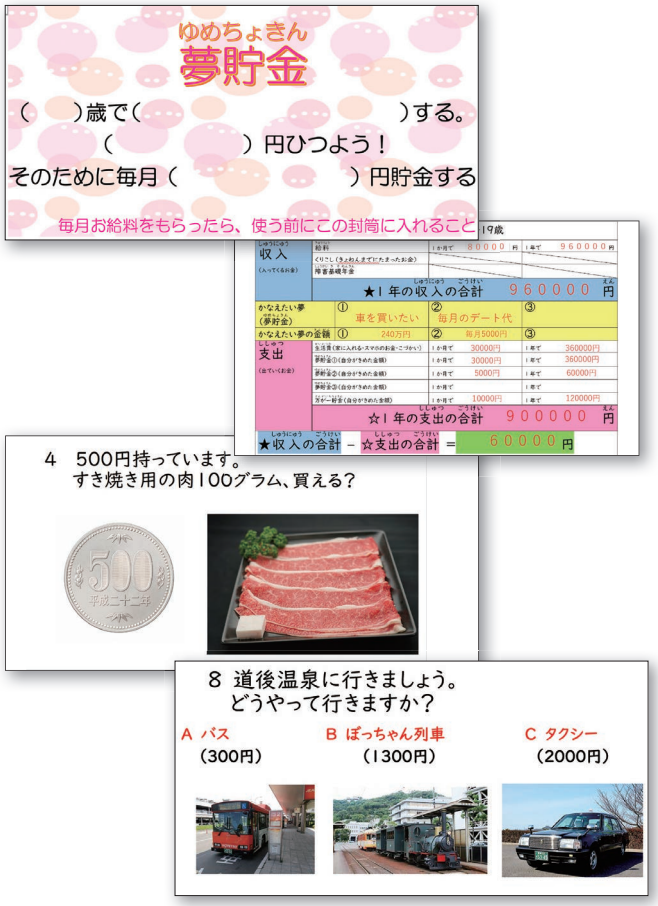
カップ麺と生麺の値段や、扇風機3カ月とエアコン1カ月の電気代の比較など、身近なものや生徒が将来やりたいことの値段をクイズで学びます。

「日用品の値段もほとんど知らない生徒がとくに驚いたのは、豆腐やもやしの値段の手頃さや、電気や水道にお金がかかることでした。授業後、『自動車学校に行きたいので貯金する』といった前向きな感想が見られました」。

■バーチャル買い物ゲーム

バーチャルで高知市中心街に行き、予算内で買い物のミッションを達成して帰ってくるという授業です。

「予算内でどの交通機関を使い、何をどれくらい買うか、先を考えた行動を学ぶ学習となります。生徒はタクシー料金の高さに驚きながらも、残金や商品の内容、賞味期限などを考えて、楽しくミッションを達成しました。『高いけど、中身を入れ替えられる方がエコだから選ぶ』と言う生徒もいました。同じ学びの『バーチャルで出かけよう』では、仮想の旅行にさまざまな価格タイプの宿やお店、交通機関などを登場



実践するさまざまな金融教育授業の教材例。上から「夢貯金封筒」、「お金の未来ノート」、「もののねだんあてクイズ大会」、「バーチャルで出かけよう」

8万円の給与を貯金、食費、携帯代、パチンコ代・宝くじ代、お小遣いの封筒に振り分ける疑似体験。リアリティを出すために本物のお金を使用

「一人暮らしをする」など、自分の夢を実現させるために、8万円の給与を毎月どう振り分けるかを自分で考えて、用紙に書き出す

させて、できるだけリアルな体験ができるようにしています」。

■Dreams come true！

「東京でコンサートを観る」、「家を買う」、「結婚式を挙げる」といった各生徒の夢の値段と、夢をかなえるためには何をすべきかを学びます。

「卒業後のライフプランを考える学習です。夢をかなえるためには貯金が大事であり、夢貯金封筒（夢やライフプランを実現するための貯金）を作らせて、『給与をもらったら一番先に夢貯金封筒に決めた金額を入れること！』と伝えます。また、『お金の未来ノート』という本校独自の教材を使い、生徒自身が何歳で夢をかなえたいかを決めて、毎月の貯金額やライフプランを立てる学びも実践しています。学生時代は親のクレジットカードで多額のゲーム課金をしていた生徒が、夢貯金封筒がぶ厚くなる＝夢の実現に近づくことが分かり、夢貯金のために毎日意欲的に働く姿はうれしい学習成果です」。

■かっこいい社会人のお金学習

特支高等部の架空の青年が登場し、銀行口座を作る、卒業して給与と給与明細をもらう、給与を使うといった各シーンで、銀行の仕組みや給与明細の見方、税金の意味などをクイズ形式で学んでいきます。

「知的障がいの特支教育ではあまり取り組んでこなかった、公民科的内容を含む社会の仕組みを学べるようにしています。税金の学習では、自分の働きが社会全般につながっていることを理解し、自己肯定感の低い生徒が『税金を払う大人になる！』と社会人生活に意欲を燃やしたことが印象的でした」。

他教科との協働と家庭との連携で生徒の明日につながる金融教育を

金融教育に取り組んだことで、生徒が大きく変わりつつあることを実感した安岡先生は、今後の抱負について意欲的に語ります。

「生徒たちにとって、より充実した金融教育を行うためには、やるべきことが山積みです。例えば、支援度の高い生徒にも、所持金内での買い物やお金を貯めることなどをもっと学ばせたいと思います。また、生徒の長い人生のためにどのような学びが必要なのかを教員同士がよく話し合うことで、他教科との協働につなげていきたいとも考えています。キャッシュレス化が進む社会と、知的障がいの生徒がどう向き合っていくべきなのかも、今後の大きな課題です。そのために、私自身も含めて教員が、社会や経済の動きなどについて学びを深め、家庭ともより連携を図りながら、生徒の明日につながる金融教育を行っていきたいと思います」。